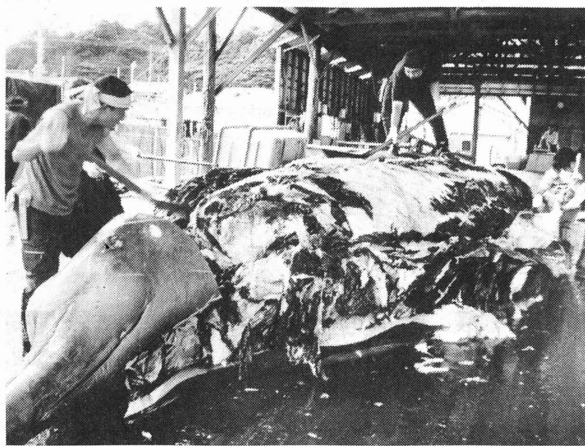


春風社

「ありのままの姿を記録」小関氏 写真集『クジラ解体』刊行



ツチクジラの解体現場（『クジラ解体』より）



捕鯨問題が世界的に物議を醸しているなか、写真家の小関与四郎氏（75）が、日本のクジラ漁の古今を写し出したモノクロ写真集『クジラ解体』を春風社から上梓した。一昨年には映画「ザ・コーヴ」によって太地町のイルカ漁が批判的に描かれるなど、日本の立場はますます厳しいものとなっているが「ありのままの姿を正面から見据えて記録するの」が私の信条なのです」と小関氏は訴えている。

小関氏は1935年千葉県生まれ。地元を拠点にこれまで『写真集 成田国際空港』（木耳社）や『九十九里浜』（春風社）などを刊行してきた。小関氏自身、海の町に育ったとはいえ当時は「鯨の水揚げの様子などを見る機会はなかった」といふ。契機となったのは1986年。大型捕鯨が規制されるとの情報が「今のうちに撮らなければ」と思った。『クジラ解体』は、その際の南房総・和田浦港での解体現場を中心に収める。

人間の背丈よりも直径が大きい胴体を有するマッコウクジラを、「解剖さん」と呼ばれる捕鯨会社の作業員がわずか30分ほどで解体している。ほとぼるするクジラの血、切り分けられた分厚い肉片、男たちの躍動する筋肉。「命の上に命が成り立つ」という当たり前のオキテを、改めて突きつけられているような迫力がある。さらに、写真集には「ザ・コーヴ」でも話題となった古式捕鯨の町、和歌山・太地町や、現在も日本で唯一鯨の解体を公開している和田浦港なども改めて取材し、収録した。

写真は全121点。絵解きは巻末のサムネイルにまとめて載せた。本編から一切の文字を排すことによって、かえって映像が強く迫ってくる。また、色校正は小関氏と担当編集者らで計4度も行ったほどのこだわりようだ。

春風社の三浦衛社長は「日本人が鯨をいかに大切にしてきたかを理解してもらえらるだろう。命の根源を問うことで、へりくだりの思いも出てくるのではないかと今回の出版の意義を話す。

同書の刊行にあたり、俳人の金子兜太氏、料理家の道場六三郎氏、俳優の地井武男氏など、各界の著名人が推薦文を寄せられている。そのひとり、作家の山本一力氏は「血の一滴までも無駄にせず、仕留めたクジラの成仏を願う漁師。その真摯な姿が活写された、見事な写真集だ」と賞讃を惜しまない。

初版700部、本体1万5000円。